2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**情報教育に特化したスチューデント・アシスタント業務の研究** **－文系学部におけるデータサイエンス科目必修化をふまえて－**
キーワード	①情報教育、②スチューデント・アシスタント、③授業実践

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	オオニシ　ミキ 大西　未希
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	駿河台大学　情報処理教育センター　助教
現在の所属先・職位等	駿河台大学　情報処理教育センター　助教
プロフィール	慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 修士課程修了。東京大学大学院 学際情報学府 博士課程単位取得退学。専門は社会学で、フィールドワークをもとにした質的研究を行ってきた。主な関心は地域課題や趣味活動などに取り組む実践コミュニティにある。 そのいっぽう、文系学部における情報処理演習の授業を担当するなかで、学生一人ひとりの習熟度に応じたきめ細やかな学びの場をどう作るかという課題意識を持つようになる。現在は駿河台大学 情報処理教育センター 助教として、授業運営とあわせて、授業を支えるスチューデント・アシスタントの育成に関する研究に取り組んでいる。

1. 研究の概要

本研究は、情報関連科目の授業のスチューデント・アシスタント（以下SA）に求められる知識やスキル、コミュニケーションのあり方を明らかにしていく研究である。情報教育に特化したSA業務のあり方を体系的に整理する試みはこれまで十分に行われておらず、本研究はその先駆けとなるものである。

授業運営者としての記録や、SAによる業務報告といったデータを継続的に集め、各学期後にはSA・受講生へのインタビューも行う。そこから、経験の中で身についた認知的側面（つまづいている学生を発見する等）と、技術的側面（Officeソフトの知っておくべき操作法等）の両方を洗い出し、情報教育に特化したSA業務マニュアル・育成プログラムの開発を目指す。

2. 研究の動機、目的

内閣府によってSociety5.0の実現が打ち出されて以来、文部科学省は高等学校学習指導要領を改訂し、文系・理系を問わずすべての大学生が初級レベルの ICT リテラシーを身につけることを目標に掲げている。

一方で筆者はこれまで大学の情報教育に携わりながら、文系学部に所属する学生たちの間にある ICT リテラシーの差を目の当たりにしてきた。今後、数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度（以下 MDASH）の認定校となる大学が急増し、データリテラシーを養う情報科目の必修化が進むと見込まれる中、学生一人ひとりの理解度に対応できる学習環境づくりは急務である。授業の円滑な進行やきめ細やかなサポートを実現するうえで、授業を支え

る SA の存在は欠かせないものとなっているが、SA に具体的にどのような業務が求められるのかについては、これまで十分に整理されてこなかった。

そこで本研究では、情報教育に特化した SA に求められる知識・スキル・コミュニケーションのあり方を教員と SA の実践と省察によって言語化することを目的とする。その成果は研究大会での発表や論文といった形でまとめ、他大学でも参考にできるよう広く発信する。

MDASH 認定校はモデルカリキュラムに沿って授業を進めるため、ある程度どの大学にも通じる形に落とし込めると考えている。本研究を発展させることで、幅広い大学における情報教育の質の向上につなげていきたい。

3. 研究の結果

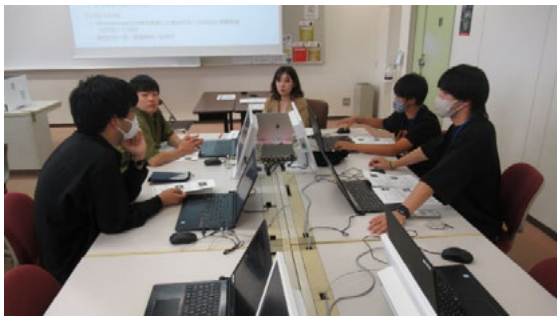
情報教育に特化したSA業務を「言葉にして共有できる形」に整理していくため、以下の3つの方法でデータを集め、分析を行った。

<u>①授業観察の記録</u>
授業を運営する立場から、その場で気づいたことをノートに記録した。

<u>②SAによる業務報告の分析</u>
毎回の授業後、SAには「授業の内容」「学生の様子」「対応したこと」「気づきや感想」をフォームに記入してもらい、その内容を分析した。

<u>③SA・受講生へのインタビュー</u>
学期末に、担当クラスのSAと受講生各10名程にインタビューを行った。インタビューで見えてきた課題や気づきをSAに共有し、秋学期はそれをふまえて業務にあたってもらった。学期末に再度インタビューを行い、変化を確認した。





写真：SA 業務振り返りの様子

これら3つの方法でデータを収集し、そこから見えてきたSA業務についてはSA業務振り返りの機会で共有することができた。今後はこれらをもって実践をするとともにさらに分析を深め、成果をまとめてゆく。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究を通じて、現場での経験や勘に頼りがちだったSA業務の知恵を、言葉にして共有できる形に整えるプロセスに携わってきた。

今後は、これまでの研究成果を政策情報学会大会（2026年12月予定）等にて発表する予定である。教育現場での実践や、そこから得られた知見を研究者コミュニティに向けて共有するとともに、他の教育現場からのフィードバックを得ることで、研究の精度をさらに高めていくとともに、授業を支えるさまざまな人材の育成に活かせる形へと発展させていきたい。

また長期的には、論文としての成果公表にとどまらず、教育現場で実際に参照できる形―情報教育に特化したSA業務マニュアルや育成プログラムのガイドラインとして整備していくことを目指している。他大学の授業づくりにも活用できる汎用的な形に発展させ、幅広い教育現場に還元していくことが、研究者としての今後の目標である。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

このたびは、若手・女性研究者奨励金にご採択いただき、誠にありがとうございました。本研究は、パソコンに苦手意識のある学生さんも多い文系学部で情報処理演習科目を担当する中で抱いた「一人ひとりの習熟度に向き合い、質の高い授業を実現したい」という思いから、新たにスタートさせた、情報処理教育に特化したSAとの授業づくりに関する研究です。

これからの可能性を読み取って採択いただけたことが、今後の研究推進の大きな励みとなりました。本奨励金のおかげで、SAの業務報告やインタビューといったデータを一年かけて着実に収集することができ、現場の実践知を言葉にして共有できる形に整理する手法を新たに身につけることができました。

今後は収集したデータの分析をさらに進め、情報教育に特化したSA育成マニュアルとして整備していく予定です。本学にとどまらず、同じ課題を抱える他大学の授業づくりにも役立てられるよう内容を整え、広く発信していきたいと考えております。頂きました奨励金を有効に活用し、より一層研究に精進するとともに、誠実に学術的・社会的貢献を目指してまいります。今後ともご指導ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。